

年譜 1900(明治33)5月25日宮城県本吉郡柳津町(現津山町)字石貝82に生る

1901(明治34)5月25日実際に生れた日(旧暦)

1911(明治44)部落の尋常小学校分校に特別入学(4年つけ出し)ここで始めて
戸籍に入れられる』

資料 早川智寛翁略伝(友部伸吉編)

10. ヤン・レツルの経歴

問 大正2年に落成し、昭和44年3月2日惜しくも焼失した松島パークホテルの設計者、ヤン・レツルは、どんな経歴の人だったのですか。⁽¹⁾

答 ヤン・レツルは、明治末年オーストリアから来日し、松島パークホテル・上野精養軒・上智大学・聖心女学院などの設計者として名を残した建築家ですが、その経歴は全く知られていませんでした。有名な広島原爆ドーム〔広島産業奨励館〕も、そのすぐれた作品の一つでした。詩人の藤田文子氏が、原爆ドームの設計者を経歴不明のままにして置けぬと、チェコ大使館にも調査依頼をされましたが、応答なしで1年も経過してしまいました。そこで藤田氏は、昭和43年1月、自らチェコに飛び、困難な調査をとげ、ヤン・レツルのことを明らかに掘り出されました。そうして、その調査報告「チェコ人だった原爆ドーム設計者」を「世界」(岩波書店)の1969年8月号に公表されました。それによりますと、ヤン・レツル JAN LETZEL の経歴は次の通りです。『1880年4月9日、チェコ東北部の町ナホトに生まる。建築のための特別の中学を卒業して、1900年プラハ美術専門学校建築科に入学、3年間ヤン・コチュエラ教授の許で勉学、卒業後エジプト王の第一代理者のお抱え建築家として3年間働いた。⁽³⁾1907年(明42)、東京のテ・ランデ建築会社に就職して日本へ来た。⁽⁴⁾1909年(明42)銀座京橋にヤン・レツル建築事務所を開設、1915年(大4)第一次世界大戦後の不景気で止むなく閉鎖した。この間多くの作品がある。一旦帰国。1918年チェコがオーストリアハンガリー帝国から独立するや、チェコ貿易省のアタッシェとなって再来日、3年間との条件付でコンサルタントをした。再び建築家として活躍することを念じていたが、心臓病となり、1925年12月26日プラハにて没。享年四十五歳。作品、上智大学、聖心女学院、雙葉高等女学校、上野精養軒大日本私立衛生会、麻生霞町天主教会堂、長与男爵邸(現存)、山陽ホテル、宮島ホテル、松島パークホテル(焼失)等。

(註)原爆ドームは、元の名を広島県物産陳列館と称し、広島県の産業発展に貢献したのみならず、

展覧会や博覧会、各種催し物の会場として広く利用された。大正3年1月起工、同年4月竣工で、当時としては大工事であった。レツル33～35歳の作品である。昭和8年広島県産業奨励館と改称された。…

さて茲で昨秋広島で行われた日本建築学会大会に於て、佐藤重夫教授が、ヤン・レツルを「ウィーン美術大学教授」でウィーンで没した等々全く事実無根の発表（「大会学術講演梗概集」より引用）をされたことは、誤りであることを指摘しておかねばならない。戦後二十三年、ようやくにして、ヤン・レツルはチェコ人建築家であったことが実証された。今後は「広島市史」をはじめ他の刊行物産等にもこのことを明記し、真実のヤン・レツル伝を後世に伝えて戴きたい。』

注(1) P25「12. 松島パークホテル」参照。

注(2) 昭和20年8月6日午前8時15分、人類最初の原爆が広島に投下、閃光一瞬にして死者20万人、全市は悲惨な焦土と化した。奇蹟的に残存したドームはヒロシマの悲劇のいたましい物証であり、シンボルである。その掲示板に『大正四年、オーストリアの建築学者ヤン・レツル(JAN LETZEL)の設計で、欧州風のスタイルは、当時中国地方唯一の近代建築物として長く市民に親しまれていたが、昭和二十年八月六日八時十五分、この五七〇メートル上空で原子爆弾が炸裂…』と記されている。

注(3) 「チェコ人だった原爆ドーム設計者」(藤田文子。「世界」1968年8月号の内)に、『最も印象深いのは、レツルの生れ故郷ナホトを訪れたことである。ここは、プラーハから汽車で六時間、ポーランドには僅か一時間の所にある。出迎えの方から早速、町の中心にあるベラネクという国営ホテルに案内されたが、そこは元レツル・ホテル即ちレツルの生家なのであった。思いがけなくレツルの生家に一泊できた私は、翌朝ホテル入口で記念撮影した後、姪の御一家を訪門した。レツルの父は、1700年から続いたレツル・ホテルの経営者で、彼は七人兄弟の六番目であるが、既に兄弟も皆亡くなり、現存の近親者は姪御さん達なのであった。レツルの思い出話を伺ったり、写真や手紙、日本で描いた絵や愛好品等を拝見したり、資料を戴いたりした。この日は新聞記者も取材に来た。雪が降り出したが町外れのレツルの墓にもお詣りして来た。墓碑には JAN LETZEL ARCHITEKT 9-4 1880 + 26-12 1925と刻まれていた。』と記している。

注(4) 「チェコ人だった原爆ドーム設計者」(藤田文子。「世界」1965年8月号の内)に『チェコでは、国際交流協会と建築家同盟のお世話になった。建築家同盟では古いことであるので、七十代のスターリー教授を紹介され、レツルの経歴を話して下さった。ヤン・レツルは、私の確信した通りチェコ人であった。1880年ポーランド国境に近い町ナホトに生まれ、1925年プラーハで亡くなっていた。スターリー教授は、レツルが、チェコに於ける近代建築の創立者で世界的に有名なヤン・コチェラ教授の最初の学生の一人で、且つ優秀な学生であったことや、美術専門学校の同窓生の、殆んどが故人が行方不明なこと、レツルの家

族の生存についても不明であると言われた。チェコスロバキア建築家同盟議長のゴチャール氏は、レツルについて全然御存知なかった。…建築家同盟では、結局レツルの関係者はわからなかったが、後日プラーハ放送が、ニュースの時間に私の訪門を報道してからは、レツルの親戚や友人の方から、是非会いたいと招待の手紙を戴いた。亡き夫君と共に、レツルとは美術専門学校からの親友であった八十五歳の老婦人は、チェコで最初の婦人建築家という先覚者で、エジプトや日本からのレツルの龍大な手紙を保存されていた。レツルは生涯独身であることもわかった。』

資料 チェコ人だった原爆ドーム設計者（藤田文子。「世界」1969 8月号の内）

11. 「うは矢」とは何か

問 「宮城県史」第2巻の46頁に、「うは矢」ということが出ていますが、何の説明もありません。辞書を引いたら「うは矢」は「上矢」で、上差の矢とあります。どのようなものですか。
(1)

答 「宮城県史」のその箇所は、慶長19年〔1614〕大坂冬の陣に出動した伊達政宗が、12月9日攻城部隊に下した軍令を述べたものです。この軍令は「貞山公治家記録」巻之24の慶長19年12月9日の次の記事から採っています。『九日丁亥〔ひのとい〕。早朝ヨリ御歩小姓組、御不断組、御給主組、御名懸組、御鷹師組并ニ御足軽マテ三千餘人ニ御料理ヲ下サル。時ニ公御小袖黒地ニ御肩衣〔かたぎぬ〕戻御裁付〔たちつけ〕鶉重〔うずらがさね〕ヲ着玉ヒ、御出アリ。御料理下サル。以後御自筆ヲ以テ、御定書〔おさだめがき〕相出サル、左ニ載ス。

定

- 一、一闕〔いちのくじ〕取候衆壁ノリ可申事、
- 一、二番闕ノ衆堀キハヘヲシヨセ、スキマナクウハ矢可打事、
- 一、各乗入候而モ、ウハ鉄炮打候衆、手ヲチラスウチニテ合戦之心懸第一ニ候事、
- 一、濫妨〔らんぼう〕ニカハリ候モノヒケウ〔卑怯〕タルヘク候、其上科〔とが〕ニ可申付事、
- 一、ウハ矢能仕候衆、見届褒美可下置事、』

「伊達治家記録」（平重道編、宝文堂版）は、「ウハ矢」に『上矢、上差とも言う。箆の征矢にさし添える二筋の矢、鎗矢又は雁又の矢を用いる。』と辞書的な注解をつけています。しかし、この場合の上矢は、第一線部隊の突入を容易ならしめるための、第二線部隊の掩護射撃のことであります。「上」とは、石垣をよじ上って前進する味方将兵を損傷することなくその上方を通り越して、敵勢に到達させるための、矢道の位置を指すものであります。上の軍令第3条の「うわ鉄炮」も、